

社会的ノスタルジアが二者間の会話促進に与える影響

○村山瑛・西村太志

(広島国際大学大学院心理科学研究科・広島国際大学心理学部)

問題と目的

懐かしいという感情であるノスタルジアは、活発感等のポジティブな感情を生起する(小林ら, 2002)。また、ポジティブ感情は会話量を増加させる(藤原・大坊, 2012)。以上のことからノスタルジアを感じることでポジティブ感情が生起され、会話が促進されるという一連の過程を検討する。

ノスタルジアは個人的・社会的の2種類に分類できる(仙田ら, 2014)。個人的ノスタルジアはその人個人の過去を思い返し感じるものである。一方、社会的ノスタルジアは古さや過去を連想させるものを見ることによって感じるものである。個人的ノスタルジアに比べ、社会的ノスタルジアに関する検討は少なく、解明されていることが少ない。従って本研究では社会的ノスタルジアを喚起することで二者間の会話促進にどのような影響が生じるのかについて検討を行う。仮説は(1)感情喚起群は統制群よりポジティブ感情の生起量が多い、(2)感情喚起群は統制群より発話量が多い、の2つを検討する。

方法

実験参加者:大学生 40名(男性 20名、女性 20名)
 手続き:実験は初対面同性ペアで行った。感情喚起群に予備調査により選定した社会的ノスタルジアを喚起させる写真 10枚を、統制群には喚起させない写真 10枚を1枚 10秒間隔でプロジェクターにて呈示した。呈示後操作チェック、多面的感情状態尺度・短縮版(寺崎ら, 1991)、個人特性に関する尺度に回答を求め、質問紙回答後5分間を自由会話の時間とし、その会話を録音した。会話を逐語記録に起こし、内容を小川ら(2003)の研究を参考に VRM のカテゴリーに分類し検討を行った。

結果

社会的ノスタルジア喚起の操作チェック項目について1項目6件法で群間比較を行った。また刺激呈示後の感情状態について *t* 検定で分析を行った。各種統計量を Table.1 に示した。

社会的ノスタルジア感情が喚起された。また、非活動的快と親和が高いことが示され、倦怠が抑制された。この結果から仮説(1)は一部支持された。

VRM の発言頻度(回)について *t* 検定で分析を行

ったが、群毎での差は認められなかった。各種統計量を Table.2 に示した。

Table.1 社会的ノスタルジアと感情状態についての群毎の平均値と α 係数と統計量

	α 係数	感情喚起群	統制群	<i>t</i> 値	効果量 <i>d</i>
社会的ノスタルジア感情		3.70(1.26)	2.55(1.19)	2.97 **	.92
P1 活動的快	.83	1.71(0.48)	1.72(0.64)	-.03	-.10
P2 非活動的快	.88	3.16(0.61)	2.28(0.75)	4.00 ***	1.26
P3 親和	.85	2.18(0.71)	1.72(0.68)	2.09 *	.66
P4 集中	.84	2.03(0.58)	1.98(0.80)	-.65	.07
N1 抑うつ	.81	1.75(0.92)	1.58(0.21)	.68	.25
N2 敵意	.79	1.09(0.24)	1.11(0.23)	-.20	-.06
N3 倦怠	.82	1.49(0.50)	1.97(0.80)	-2.23 *	-.71
N4 驚愕	.84	1.25(0.43)	1.22(0.39)	.83	.07

註:抑うつ・驚愕に関して信頼性の低い2項目を除外して使用した。

()内は標準偏差を示す。

Table.2 VRMカテゴリーの群毎の平均値と α 係数と統計量

	感情喚起群	統制群	<i>t</i> 値	効果量 <i>d</i>
開示	16.70(8.39)	15.95(7.42)	0.30	.09
情報	20.65(9.26)	21.95(8.19)	-0.47	-.14
質問	11.70(7.12)	11.75(7.72)	-0.02	-.01
応答	5.85(3.01)	4.55(3.25)	1.31	.41

註:()内は標準偏差を示す。

以上の結果から仮説(2)は支持されなかった。

考察

社会的ノスタルジアを喚起させることで非活動的快、親和のポジティブ感情が喚起された。個人的ノスタルジア感情に関する小林ら(2002)の研究では群間で活動的快、親和で有意な差が認められ、非活動的快とは有意な差は認められなかった。社会的ノスタルジアと個人的ノスタルジアは感情喚起に関して一部機能の違いがあることが示唆された。ネガティブ感情については倦怠が抑制された。先行研究では、個人的ノスタルジアが退屈感を減少させることが示されている(Wijnand et al. 2013)。よって社会的ノスタルジアにもこれに類する機能があることが考えられる。

VRM のカテゴリーの発話回数について、今回使用したカテゴリーの全てにおいて有意な差は認められなかった。藤原・大坊(2012)では活動的快が生起されたことによって、会話量が高まった。本研究では活動的快が生起されなかった為会話量が高まらなかったと考えられる。